

Title	障害児を育てる母親の視点の深化の過程に関する一考察(2)
Author(s)	石川, 友香
Citation	大阪大学教育学年報. 7 P.193-P.204
Issue Date	2002-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/10191
DOI	10.18910/10191
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

障害児を育てる母親の視点の深化の過程に関する一考察(2)

石川 友香

【要約】

人が様々な経験を通じて、自分自身の中に両極的な考えがあると見出していく過程を「視点の深化の過程」としてとらえ、その過程の具体的な在り方を示すために重症心身障害児を育てる母親六名にインタビュー調査を行ったが、本論文ではそのうちの一名に焦点をあてて考察を行った。その母親は、障害をもつ子どもとの生活を通じて様々な経験を重ねていったが、結局はもともと抱いていた考えにそれほど大きな変化はなかった、と語っており、そのため、一見するとそれほど視点が深化しないような過程を経たと感じられる事例である。しかしながらこの過程は、視点が深化しなかったのではなく、視点が深化することによって得た観点をもって、一方の考えを意識的に改めて選んでいく過程ではないかと考察した。そこで、C.G. ユングが論じている「意識的で成熟した観点」をもって「自分自身の運命を意図的、意識的に受け入れる」女性という概念を用いることによってさらにその考察を深めた。さらに、ユングの意識の「発展・分化」の様子に関する考えをもとにして「視点の深化の過程」とは円環的な軌跡を辿る過程であろうと考え、この過程をに新たな一段階を加えて再定義した。

1. はじめに

人がそれまでとは違った視点を得て、そこから事象を眺めることができるようになるということ、つまり自分の心の中に両極的な二つの考えを抱くようになるにはどのような過程があるのだろうか。筆者は、そのように自分自身の内面により深く関わっていくなかで両極的な考えを抱くようになる過程を「視点の深化の過程」として捉えた。そして、ヒルマン (訳書 1997) の「見抜く (seeing through)」という四段階にわたる一連の過程¹⁾を参考にして、日常的にも起こりうるであろうと思われる視点の深化の過程を想定し、それを重症心身障害児を育てる母親の体験の中に見いだそうと試みた (石川 2000)。また、重症心身障害児の母親の視点の深化の過程を押し進めることになった「障害を持った子ども」という存在にも注目し、特に子どもを育てることを通じて両極的な二つの考えを抱くようになった四事例を取り上げて考察した (石川 2001)。そこでは、二つの神話を紹介し、そこにみられる「障害を持った子ども」像から、障害を持った子どもというのは「不完全であるため嫌われる存在であるが一方でその中で完全性を成就するという神聖な存在」という両極的な特性を有している存在ではないか、ということ論じている。

しかしながら視点が深化し、その行きつく先が「両極的な二つの考えを抱く」状態であるならば、その後においてその状態を自分自身の中に抱えて生きて行くというのは、どのようなことなのであろうか、という疑問が生じてくる。そこで、本研究では重症心身障害児の母親のインタビュー調査から、ある事象が生じ様々な経験を重ねていった後も結局はそれ以前に抱いていた考えにそれほど変化はなかったと語られた一事例の「視点の深化の過程」を取り上げ、さらにユングの理論を用いながら論じることによって、先の疑問に対する回答を試みようと思う。

2. 視点の深化についての調査の概要

(1)重症心身障害を持つ子どもを育てる母親の視点の深化についての仮説

先述したように、筆者はヒルマンの「見抜く (seeing through)」という過程をもとに重症心身障害をもつ子どもを育てる母親に生じて来るであろう視点の深化の過程を以下のように想定した。

I 考え方が変わるようなある出来事が生じる

まず、今まで抱いていた考えと異なった考えが生じてくるためには、そのきっかけとなる出来事の内容が不可欠である。そこで、まず最初の段階として、母親がそれまで抱いていた考え方は異なった考

えが後に生じてくるきっかけとなる出来事を示すこととした。

Ⅱ その出来事がきっかけとなって以前とは違う考えが生じてくる

前段階の「Ⅰ」であげられた出来事を通じて、母親に生じてきた考えを示すこととした。また、この段階で示される考えは、それまでのものとおよそ対極的な考えであり、これまで抱いていた考えよりも正しいのではないかと母親が感じるような考えである。

Ⅲ 以前とは違う考えがさらに発展する

母親が「Ⅱ」で生じてきた考えを抱き続ける中で、さらにその考えが発展してゆき、母親自身のその後の生活により密着したものになっている考えを示すこととした。

Ⅳ Ⅰが生じる以前の考えとそれとは違う考えの両方が併存する

Ⅰが生じる以前の考えとⅢで生じてきた考えは、両極的なものであろうと想定される。そして、この段階では、これら両極的な考えが母親の心の中にもともに存在している状態を示すこととした。

このような四段階を想定し面接調査を行った。

(2)調査・分析の概要

面接調査は重心障害児を育てている母親六名を対象に平成11年6月～9月にかけて行われ、半構造化面接法が用いられた。面接時間は約60～120分、面接の内容は承諾を得た上で録音をした。面接においては、重症心身障害を持った子どもが生まれた時から今までにどのような出来事があったか、その間に母親がどのようなことを考えたのか、またはどのように考えが変わっていったのか、ということを中心にかなり自由にお話していただく方針をとった。その中で「それまでは～と思っていたのに、それからは…と思うようになった」という話が出てきたときに、その考えの内容、その変化が生じた時期、きっかけなどについて詳しく聞くことにした。また、現在はどのような考えを抱いて生活を送っているのかということも聞くことにした。

インタビューの内容は全て書き起こされ、ヒルマンの「見抜く過程」を参考にして筆者が想定した重症心身障害児を育てる母親の視点の深化の過程「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」の4段階をもととして分析された。分析方法としては、書き起こされたインタビューの中で「それまでは～と思っていたのに、それからは…と思うようになった」という内容に注目し、その変化が生じるきっかけとなった事象（Ⅰ）、その事象が生じる以前の考え（Ⅰ以前の考え）、その事象が生じた後の考え（Ⅱ）をまず抽出した。その後、事象が生じた後の考えを抱きながら生活していった結果、その考えがどのように発展していったのか、ということが話されている内容（Ⅲ）を抽出し、さらに現在において抱いてもⅢで抽出された考えとⅠ以前の考えとの両方の考えが存在しているという内容（Ⅳ）を抽出した。その後、改めて抽出された内容がそれぞれⅠ～Ⅳ段階に相当するのかが検討した。

3. 事例

面接調査の対象となった母親は6名の中で筆者が前項で想定した重症心身障害児を育てる母親の視点の深化の過程の「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」の四段階の過程を示しているのが四名であった。また、「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」まで示されて「Ⅳ」はまだ示されていないという、いわば三段階でとどまっていると思われるのが一名、「Ⅰ、Ⅱ」までは明確に示されているものの、その後の様々な経験を通じて、それまで抱いていた考えと対極的な考えを自分のものとして抱くことは最終的には出来ないと言っているのが一名であった。

四段階と三段階の過程を示している事例については他論で扱っているので特に取り上げることはせず、ここでは、「Ⅰ、Ⅱ」までは明確に示されている事例を取り上げて論じていこうと思う。

事例 Fさん

①家族構成

夫…55歳 Fさん…51歳 長女…27歳 次女…24歳 長男f（本児）…19歳

②概要

出産後すぐに子どもだけが他の病院へと転院させられてしまったり、担当医らのFさんへの対応に何となく不自然さを感じていたが、子どもが障害を持って生まれたということは予想もしてなかったという。Fさんは退院後、夫からまだ入院中のf君の状態を聞いてとてもショックを受け、入院しているf君の様子を見に行けないほどであった。

小学校入学まで、日中はずっと家でFさんが一人で面倒を見ていた。小学校入学の際に、教育委員会の方の勧めもあってとりあえず養護学校の訪問クラスを希望し入学したが、やはりf君にとっては通学した方が刺激もあって良いのではないかと感じて訪問クラスから通級クラスへの変更を希望する。しかし、この変更がなかなか認めてもらえず、最終的に変更が認められたのは中学3年生の時であり、結局1年間だけしか学校に通学ができなかった。卒業後は作業所に1年間通い、翌年からはデイ・サービスに通うことになる。

③母親の視点が深化していく様子(インタビューの内容より)

「学校に行くまでは、本当に、家の中だけで。…公園に連れて行ったりっていうことはできなかったですね。やっぱり子どもって正直だから、ちょっと変わっている子がいると振り返ったり、どうしたのって言ったり。別に、悪気じゃなくて、純粋な気持ちで、あれどうしたのかなっていう感じなんですけどね。でも、そういうのがとってもこたえたんですよ。「やっぱり、障害がないほうがいいっていうか…。よく、障害者の親っていうか、家族っていうか、そういう人は健康な人よりも…何ていうんだろう…障害者でも良いんだっていうんじゃないけど、…障害者だからという引け目がないっていう…本来はそういう風に段々としていかなければならないんでしょうけど、いや、私はそこはできない…やっぱり障害者よりは、元気な方がずっといいし、できれば、うーん、どっちかといえば人目には晒さないっていうか。…でも、少しそういう考えが取れてきたのは、一番上の娘が青年の主張でfのことを書いて、結構いいところまで(=入選) いっちゃったんで。だから、その時に、じゃあ、本当に自分のところだけで対処するんじゃないかと、他の人にお世話になるところはお世話になっていこうかなって感じになって。それまでは、いろんな福祉サービスは、全然、一切受けていなかったんですね。医療費も重症の子だと無料なんですけど、その手帳もうけていなかったんですよ。でも、まあ、障害者手帳もきちんと判定を受けてとって、医療費もできればお世話になって、そういう風にして、お世話になるところはお世話になっていいかなって。小学校に入ってしばらくしてから、その手続きをとって。それで、その時から割とお散歩に出たり、まあ、そういうこともできるようになったというか。それと学校もこの時期いろんなところに連れていってくれたから、そういうのもあったんですよ。「今はね、気持ち的に全然楽ですね。fがデイ・サービスに行っている間は安心していろんなことができるっていうのがありますからね。…私なんか、もっと早く障害をもった子どものお母さんに出会えていたら、また全然違っていたんだろうなって思う。一緒にいろんなことをしたり、そういうことをすることで、解決されるっていうか、気持ちが楽になるっていうか。…それとね、きょうだいをもっているとね、やっぱりそっちの子に期待できるっていうか、そういう逃げ道があるような感じがするんですよ。」

Fさんは外に出ると特別な目で見られてしまうことをとても辛く感じており、福祉のサービスにおいても、できるだけ援助を受けずに生活していこうと思っていた。しかし、障害を持つf君に対する思いを綴った長女の文章が入賞したり、小学校の先生が遠足などに連れ出してくれたりしたこと(I)をきっかけとして、Fさん自身、または家族が全部f君の世話をするのではなく、ある程度世間から援助を受けてもいいかな、と思うようになったという(II)。f君との生活を通じて、色々気付けたことはあるものの、やはり現在においても、できれば健康な方がいいと思うし、引け目もあるし、できれば人目にさらしたくないと言う気持ちを以前ほど強くないものの抱いているのは確かであると語っている。

4. 考察

Fさんは面接調査において、ある事象が生じ様々な経験を重ねていった後も結局はそれ以前に抱いていた考えに大きな変化はなかったと語っている。しかしながら、このことはFさんの視点が全く動かなかったということを示しているのであろうか。

Fさんは、自分自身や家族が全部 f 君の面倒をみていかねばならないという考えを抱いていた。しかし、障害を持つ f 君に対する思いを綴った長女の作文が入選したり、小学校の先生が遠足に連れて出してくれるなどの事象がきっかけとなって (I)、そのような頑なな考えに変化が見られ、ある程度は世間から援助を受けても良いのではないかと、思い始めるようになる (II)。その後、他の障害を持つ方々、その家族との交流を始めたり、f 君をデイ・サービスに通わせて、Fさんは自分が自由に使える時間を持つようになる等と変化していき、時にはもっと早く仲間と出会っていたら、Fさん自身もう少し精神的に楽な日々を送っていたかも知れない、と感じることもあると言っている。このことから、それまでとはおよそ対極的な考えを抱えていること、つまり視点が動いていることは分かる。しかしながら、Fさんは障害を持つ子どもを育てる母親に対して「障害者でも良いんだ (中略) …障害者だからという引け目がない」というような考えを抱くようになるだろうと世間の人たちが期待していることや障害児の親の会などにおいてそのような考えを抱く親が大多数であることに触れて「本来は段々とそういう風にしていかなければいけないんですけど (中略) 私には (それは) できない」と言っている。確かにFさんは子どもとの19年間の生活を通じて、学校をはじめとする周囲の支えや障害を持っている子どもの母親たちとの交流によって色々な経験をしたり学んだことも多かったが、基本的には「障害者よりは元気 (健常) な方がずっといい」という思いを変えることはできないという考えを抱いている。そのため、一見すると視点がそれほど深化していないようにも見える。しかしながら、Fさんの抱いているこの考えは、自分自身の中に二つの両極的な考え、つまり「(ある程度は世間から) お世話になってもいい」、「引け目がない」、「散歩に出る (ことができる)」という考えと「障害者よりは元気 (健常) な方がずっといい」、「どちらかといえば人目に晒さない (晒したくない)」という考えが存在することを認めた上で、最終的に後者の考え方を支持していると語っているように感じられ、それはFさんの視点が深化することによって改めて得た考えであるように感じられる。言いかえれば、視点が深化し本来抱いていた考え方とは対極的な考え方を見いだした上で、改めて本来の考え方を自らが選んで支持しているということである。

インタビューにおいてFさんは、ある事象が生じ様々な経験を重ねていった後も結局はそれ以前に抱いていた考えに大きな変化はなかったと語っている。確かに、Ⅲの状態は明確に語られてはいないもののⅡで見出された考えが抑圧された結果として最終的に以前に抱いていた考えを支持しているのではなく、Ⅳの状態が示された上で以前に抱いていた考えを支持しているのである。つまり、Fさんの視点は「Ⅰ→Ⅱ→(Ⅲ)→Ⅳ」と深化した後に、さらに「以前抱いていた考えを支持する」という動きがあったといえるのではないかと考える。

このように視点が深化していく過程において二つの考えを見出し、それからさらに自分で考えを選択していくということとは、一体どういうことなのであろうか。特にFさんのように、最終的に選んで支持している考えが世間から期待されている考えとは対極的な考え、つまり世間一般的な価値尺度をもって判断すれば社会的に好ましくない考えである場合、そのような態度で生きていくということとはどのような意味があるのであろうか。このような生き方についてを考えると、まず次項において、ユングの *Visions* における“WINTER TERM V. 17 February 1932”で論じられているアクティヴ・イマジネーション²⁾によるマテリアル (イマジネーションのこと。ユングにしたがって以下「ヴィジョン」と表記) を取り上げたいと思う。

5. 「意識的で成熟した観点」をもって「自分自身の運命を意図的、意識的に受け入れる」女性像

“WINTER TERM V. 17 February 1932”において、ユングらはある女性患者 (以下「イマジナー」と表記) によって報告された一連のヴィジョンを取り上げて、その内容が象徴的に意味することなどを議論を

している。それらのヴィジョンのうちの一つに、イマジナーが聖堂のなかで磔にされている「キリスト」とその母「マリア」と対話することを通じて、イマジナー自身のあるがままの生き方を意識的に受け入れていく様子が描かれているものがある。そのヴィジョンの内容は以下のようである。

私は大聖堂にいた。十字架には暗いキリストが架かっているのが見え、その十字架の下でキリストの母親が泣きながら跪いていた。私は彼女に尋ねた。「悲しみの聖母よ、何故泣いているのですか?」。彼女はこう答えた。「こうなる前に、彼は私と一緒にいたのです。今や、彼は十字架の上に引き上げられています。私たちの間で何かが、壊れてしまった」。私は彼女の手を取り、そこから連れ去って言った。「あなたは一人で立つのが怖いのですか?」。私たちは死にゆくキリストの正面と一緒に立ち、キリストは私たちの方に顔を向け、私たちを見つめた。そして彼は言った。「ああ、私を創ったあなた達二人の女性よ、さあ、私を見なさい。あなた達は私をただ十字架に架けるためだけに創ったのですか?」。私はキリストにこう答えた。「ええ、そうよ、私は子宮から苦しみを生み出すの。私は、再び私の体であなただけを創るでしょうし、再びあなたは磔にされるでしょうね」。キリストはこの言葉を聞いて、目を閉じた。そして、顔をそむけた。すると、キリストの母は大声で泣き叫んで言った。「そんな言葉、あなたに言わせない」。彼女は、私を威嚇しながら立っている大群衆を呼び入れた。私は顔をベールで覆い、そして教会の外に出た。怒った群衆は「お前は、誰も話してはならないことを話してしまった」と叫んだ。私は街の曲がりくねった道を進みついには川岸までやってきた。私はそこに跪き、そして顔を覆っていたベールを上げて顔を水で洗った。一匹の白鳥が私の方に近づいてきた。籠の中に生まれたばかりの赤ちゃんがいるのが見えた。

(Jung, Visions)

このヴィジョンに関して、ユングらは様々な観点から議論をしているが、ここでは特にイマジナーとマリアの立場の違い、キリストの抱える二つの側面、そしてイマジナーが自分の在り方を公言したということについて論じているところを扱っていきたい。

まず最初に、このヴィジョンに登場している二人の女性について見ていこうと思う。確かにどちらも「キリストを創った」存在であり「子どもを産んだ女性」である。しかし彼女たちが主張している考えは全くと言っていいほど違っている。このことはイマジナーのヴィジョンにおいて、イマジナーはキリストを「十字架に架けるためだけに創った」と言い、マリアはそのようなことを「あなたには言わせない」と言っていることから明らかである。この違いについてユングは以下のように述べている。

マリアは、ただ十字架に架けるためだけにキリストをこの世に産んだということを知りたくないのです。彼女は幸せでうまくいく人生を願って彼を産んだのであり、決してこのような悲惨な死を想定していたのではなかったのです。マリアとは対照的に、女性患者はキリストを苦しみのために産んだのであり、もし今度産むとしても再び十字架に架けるためであろう、と言います。

(Jung, Visions)

そしてこの違いについて、「女性患者の方がマリアよりもはるかに意識的である」ということをユングは指摘している。

この世の苦しきは、母親が子どもをもつという事実を通じて存続させられます。つまり、子どもをもつ女性は皆、この世の苦しみを存続させるのです。「私はこの世の苦しみのためにこの子を産むのです」と言うことは、とても意識的で成熟した観点なのです。しかしながら女性は、健康で、うまくいき、幸せになると肯定的に考えて、子どもを産むのです。どの母親も、自分の子どもの人生が自分の人生よりも幸せであるように願うものです。それなので、マリアはもし自分の子どもが不幸な運命に出会ったら、まるで起こってはならないことが起こったかのように、とりわけ悲しいことだと受け取るような、とても無意識的で、原始的な女性であるのです。なるほど、母親というのは誰でもそうでしょうが。

(Jung, Visions)

確かに、母親が生まれてくる子どもの幸せを願い、そしてそれを通じて母親としての自分の幸せを感じたいと思うのは当然である。しかし常にその考えのみを抱き続けることは、このヴィジョンにおけるマリアのように「とても無意識的で、原始的な」状態にとどまっているということである。一方イマジナーのように「とても意識的で成熟した観点」をもっている母親というのは、生まれてくる子どもはこの世の苦しみを引き受ける運命にもあるということや、子どもを産むことはこの世の苦しみを受けさせるためでもある、という考えを抱いているということである。しかし、このような「とても意識的で成熟した観点」を持った女性が子どもを産むとき、彼女自身は何も引き受けないのか、というと決してそうではない。そのような観点を持った母親においても、当然生まれてくる子どもの幸せを願う気持ちは抱いているのである。それだからこそ、生まれてくる子がこの世の幸せでだけではなくこの世の悲しみを引き受ける運命にある、ということを知った上で子どもを産むという苦しみを自ら進んで引き受けていることになるのである。

ヴィジョンにおける二人の女性はこのような立場にいるのであるが、その二人を母として生まれ、正面で磔刑になっているキリストとはどのような立場にいるのであろうか。

ユングは、キリストが象徴することについて多くの見解を述べているが、このヴィジョンの議論においては「意図的な意識を持って死へと向かう人、つまり物事はあるがままでなければならぬし、人は自分個人の苦しみを受け入れなければならないという、明らかに意識的なヴィジョンを持って死へと向かう人の象徴」であると述べている。つまり、キリストは、自らの生き様を「磔刑」という究極な手段で集約的にそして象徴的に示すことによって、その姿を正面で見ていた人の心に埋もれている「磔刑」に通じる生き方を意識化させる役割を担っているのである。それゆえに、キリストとは人に心の中に埋もれている矛盾や対立のある「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れる」生き方を引き受けさせる力をもった存在なのである。そして、人がその生き方を引き受けられたとき十字架に架けられたキリストは象徴としてその人の心の中に生きることになるのである。

イマジナーのヴィジョンにおいて、イマジナーとキリストの関係はそのようなものであったように感じられる。それは、イマジナーが磔にされたキリストの正面で「『私は子宮から苦しみを産んだわ。私は、再び私の体であなたを創るでしょうし、再びあなたは磔にされるでしょうね』という発言をしていることから推測できる。しかしながら、このヴィジョンにおけるキリストはこのようなキリストの性格とは少し異なる側面も併せ持っているようである。なぜなら、キリストはイマジナーの心の中の「磔刑」である部分を意識化させたにもかかわらず、それが成された瞬間にキリストはマリアの「無意識的で、原始的な」ものと結びついてしまったからである。このことは、イマジナーの「『私は子宮から…』」という言葉にキリストが「顔をそむけ」、マリアが「あなたにそんなことはいわせない」と言っていることから推測される。ユングによると、このようなキリストの側面は「中世」に広く信じられており、その時代ではキリストは絶対的な「救済者」として考えられ、キリストの人生は「絶対に比類のないもの、聖なる神秘」として扱われていた、という。

このように考えると、このヴィジョンにおけるキリストは、「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れる」生き方を引き受けた存在でありそれを人に引き受けさせる存在であると同時に、絶対的な「救済者」、絶対的な「絶対に比類のないもの、聖なる神秘」である存在であるといえよう。それゆえにキリストの抱える二つの側面というものはマリアとイマジナーの二人を母親としているからこそ生じてきているものであるが、しかし一方で、そのような統合されていない二つの在り方を抱えた存在であるということが正面にいる女性二人をよりその人らしく対峙させていることにもなっている。

その結果、キリストにおける後者の側面とともに生きるマリアは、教会の中に残り無意識的で集約的な環境の中で群衆とともにキリストによる絶対的な「救済」を全く受身的に信じている人といえよう。一方、キリストの前者の側面とともに生きるイマジナーは、いわば「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れ、自分のあるがままを受け入れる」生き方をする人といえる。なぜなら、ヴィジョンにおいてイマジナーは、子どもを産むということに関して自分の胸の内に生じてきた矛盾し対立している考えを自分自身の中で意識化して終わるのではなく、マリアや群衆がまだ意識化していないその考えを、彼らに対して言えばどうなるかを「直観的に」ではあるが感じながらそれを言い、その発言に責任をもって行動して

いるからである。このイマジナーの生き方は、本来のキリストと同じようなものであり、そのような意味において「もう一人のキリスト自身」とみなせる、とユングは言っている。

しかしながら、一般的に「とても意識的で成熟した観点」を持って物事の真理を見極めた人というのは、集合的な道徳的価値判断に理由もなく従うような「無意識的で原始的な」人々にとっては脅威的な存在である。それが、彼らにとって、ユングのいう「普遍的な影(悪)」に相当するような内容であればなおさらのことであろう。ヴィジョンの中でもイマジナーの発言は群衆らの怒りをかい、彼女は「ベールで顔を隠して」教会を出て行くが、それは当然の成りゆきである。

最後に「生まれたばかりの子ども」が登場するが、おそらくこの子どもはイマジナーが「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れる」ことによって生まれてきた子どもであり、「磔刑」となる運命を背負って生まれてきた子どもである。そこでは、彼女という存在が、生まれてくる子の幸せを願いつつも「磔刑」という悲運をたどる子どもを産むという「とても意識的で成熟した観点」を持った母親であると同時に、「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れる」という子ども(本来のキリスト)でもあることが明示されている。

このヴィジョンによって、「意識的で成熟した観点」をもって「自分自身の運命を意図的、意識的に受け入れる」女性の在り方がイマジナーによって象徴的に示されているのであるが、次項ではこの概念を手がかりとして、もう一度Fさんの視点の深化について考えてみたい。

6. Fさんにおける視点の深化の過程について

ここでは、改めてFさんとその子どもf君との関係について論じていこうと思う。

Fさんがf君との生活を通じて得た考えは、もともと抱いていた考えに通じるものであるためにその視点がそれほど深化していないようにも見えるが、そうではなくて視点が深化し本来抱いていた考え方とは対極的な考え方を見いだした上で、改めて自らが選んで支持した考えであろうということは、本論第4項で述べた。このことを前項で扱った概念を用いて示すと、様々な経験を通じて視点が深化していくことによってFさんは「意識的で成熟した観点」を得て、そしてそれをもって「障害者よりは元気(健常)な方がずっといい」という考えを支持しているといえよう。しかしながらFさんにおいても「意識的で成熟した観点」を得るだけでなく、それをもって自分らしく生きるということ、つまり「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れ」て生きようとする側面が窺われる。それは、Fさんの「…障害者でも良いんだっていうんじゃないけど、…障害者だからという引け目がないっていう…本来はそういう風に段々としていかなければならないんでしょうけど、いや、私はそこはできない」と、言いにくそうに言葉を選びながらではあるが、どこか確信を持って話していた様子から感じられるのである。

ある事象に関して、様々な経験を経て意識的に自らが選択した考えが、「善-悪」という一般的な道徳的判断によると「悪」に通じるような考え方である場合、その考えを意識的に選択する際にはその人の内面に葛藤が生じるだけでなく、外界においても大きな対決が必要となってくる。そのことは、前節で取り上げたヴィジョンにおいてイマジナーが一般的な道徳的判断によって受け入れられないとされている考えを自分で引き受けて生きる際にその考えを公にした結果群衆を怒らせ、イマジナーは顔をベールで覆って教会を出て行っている、という様子からも窺える。一見するとその人が無意識的で原始的な状態であるために「悪」に通じるような考えを支持しているように感じられる。しかしながら、その考えを意識的に選択するということは葛藤や対決を経て自らの考えを選んでいるのであり、この点では前者とは全くと言っていいほど異なる状態であるといえよう。

同様に考えると、Fさんの「…本来はそういう(障害者でもいいんだ、障害者だからという引け目がない、という)風に段々としていかなければならないんでしょうけど」という発言からは、障害を持つ子どもを育てる母親は、様々な過程を経た後に最終的には「障害者でもいいんだ、障害者だからという引け目がない」という考えを持つに至ることが、集合的、無意識的な流れとして社会から求められている傾向が強いように感じられる。なぜならば、社会における多くの母親にとって、障害を持つ子どもを育てる母親

というのは数々の苦悩を乗り越えて子どもと共に幸せを手に入れたとても立派な母親であって欲しいからである。ユングの言うように、ほとんどの母親というのは自分の子どもが幸せな人生を歩んで欲しいと心から願っているものであり、不幸な運命に出会うことは決してあってはならないことだと捉えているのである。それゆえに、自分の子どもが幸せな人生だけではなく不幸な運命をも生きていると意識的に捉えている母親を目の前にしたときに、多くの母親は自分の子どもも多かれ少なかれ不幸な運命を生きるということに認識してしまうのが怖いのである。また、障害児を育てる親の会などにおいても「(自分の子どもは) 障害者でもいいんだ、障害者だからという引け目がない」という考えを最終的に持つようになることだけに焦点が当てられており、その考えを各々が強く抱くことによって親の会は一体感を強めているところがあるのではないかと推測される。そのため、「(自分の子どもが) 障害者よりは元気(健常)な方がずっといい」という考えは、親たちの一体感を損なうような道徳的に「悪」に通じる考えとされがちであり、その考えは「言ってはいけないこと」であり、そのような発言をする母親は無意識的で原始的であると捉えられたりするのではないかと考えられるのである。

その為、一般的な見方からすれば、様々な過程を経た後にFさんのような考えを意識的に選択して公に「言う」ことはとても勇気がいることであり、社会においてもなかなか受け入れられないことであろう。このように考えると、Fさんの苦しみというのは、先述したような「社会から求められている」障害をもつ子どもの母親像と、自分で意識的に選択した「自分らしい、ありのままの」障害をもつ子どもの母親像との間でも生じていると感ぜられる。しかしながら、Fさんが少なくとも筆者という「他者」に対して「…障害者でも良いんだっていうんじゃないけど、…障害者だからという引け目がないっていう…本来はそういう風に段々としていかなければならないんでしょうけど、いや、私はそこはできない」と言ったことは、Fさんが社会から求められている「障害をもつ子どもの母親像」だけを生きていくことができない自分を認識し、さらにそれを自分の胸の内だけにとどめておくのではなく「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れ」て自分らしく生きていこうとしている姿勢を表明している、とも受け取れよう。

このように、インタビュー調査を通じてFさんが明示したことは、視点が深化していくことによって行きついた考えを「意識的で成熟した観点」をもって眺めそれを抱きながら生きていくということ、つまり「自分自身の運命を意図的にそして意識的に受け入れ」て生きようとしているということであったのではないかと考えられるのである。

7. 視点の深化の過程について

これまで筆者は、ある事象に関して視点が「深化 (deepening)」していくということを以前とは違った考えが自分自身の中に存在していることに気付いていく過程であると想定して論を進めてきた。しかしながら、ここで多少修正する必要があるように感ぜられる。そこで本項では、この過程についてユングの理論を用いながら改めて考えて直していきたいと思う。

ユング(訳書1997)は、意識が「発展 (Entwicklung)・分化」していくと「意識にとってはさらに脅威的である矛盾対立を認識するに至る」と述べており、さらにこのことは「ほかならない自我の磔刑を意味する。すなわち統合できない対立物のあいだに自我は宙吊りされて悶え苦しむのである。」と論じている。つまり、それまで当然だと思っていたような考えや特に理由もなく信じ込んでいた事柄に関して、何らかのきっかけによってそこに意識が向けられ、さらにそれが発展・分化していくと、その結果として自分自身の中の対立する両極的な考えを見出すことになるということである。そして、見出されたこれら二つのものは等価的であるが故に意識の中心である「自我」は葛藤状態に陥るのである。この「自我の葛藤状態」においては、理由なくどちらか一方を選んで(その結果として、相対的に他方は抑圧されるのであるが)その状態に終止符を打つのではなく、その葛藤状態を意識的に引き受けること、つまり自分自身の中に対立したものがあると意識化することが重要なのである。その結果、葛藤状態の真っ只中に留まったり巻き込まれたりすることが避けられ、二つの対立したものの存在を意識した上でどちらかを選ぶ、つまり一方を含んだ他方を選ぶということになり、そのような意味において、どちらでもない「第三のもの」

を選択するというに至るのである。このことをユングは「対立物の統合」と言っているが、これは葛藤状態がなくなったということを意味するのではなく、自分自身の中に葛藤を抱えることができるようになった状態、意識的にその葛藤を抱えながら生きていくことができるという状態を示している。すなわち、自らの生に対して、新しい責任を背負うことを意味しているのである。

また、ユングは意識が「発展(Entwicklung)・分化」していく様子を、「螺旋」状でなおかつ徐々に中心に向かっていく軌跡を辿ると論じている³⁾。これは、ある一連の過程が一回(周)限りではなく、何回(周)も繰り返されることを意味している。それゆえに、一つの過程がその一連の過程を経て見出した終着点は、一見すると出発点と同じ地点に見えるが、実はそれよりも中心に近い地点にいるという状態を意味し、さらには次の新たなプロセスの出発点にもいる、ということを示している。

これらのことをまとめると、意識が発展・分化していくと自分自身の中の対立する考えを見出し、その考えの間で葛藤が生じてくるが、それを意識化した上で両方が統合された考えを支持する、という一連の過程を経た後に、また何らかのことをきっかけにして、そこから再び新たな葛藤の認識へと意識が向かってゆく、という円環的な過程になる。

以上のことを踏まえて「視点の深化の過程」を改めて示すと、

- I 考え方が変わるようなある出来事が生じる
- II その出来事がきっかけとなって以前とは違う考えが生じてくる
- III 以前とは違う考えがさらに発展する
- IV Iが生じる以前の考えとそれとは違う考えの両方が併存する
- V 一方の考えを含んだ(前提とした)他方の考えを意識的に選択すると同時に、新たな葛藤へと向かう過程の出発点に立つ

となる。ここで新たに付け加えた「V」の段階は、一連の過程の終着点でもあり同時に次の新たな過程への出発点でもある。そのため、「V」の段階に至った状態において何らかのきっかけが生じれば再び円環的な一連の過程を辿ることになるのであるが、その過程はそれ以前よりもより「中心に近い」ところの軌跡となると考えられるのである。

8. 最後に

本研究においては、これまで筆者が想定していた「視点の深化の過程」にさらなる概念を加えて、この過程が、「一回限り」ではなく「繰り返される」過程、つまり中心に向かって螺旋状の軌跡を辿り続ける過程であると定義し直した。今後は、この「視点の深化の過程」の現れ方について、さらなる文献研究や事例研究を行い、この過程に関してより詳細な検討を行っていきたいと思っている。

<注>

- 1) ヒルマンは「見抜く(seeing through)」という語を、目の前に現れている物事や問題をそのまま受け取るのではなく、何らかの(その時のその人なりの)様式で考え、眺めたりすることをくり返すことによって、さらに深い意味へと「内的に探求」することだという意味で用いている。そしてこの「見抜く」という過程を一連の四段階、「①心理学的契機(psychological moment)がある段階 ②心理学化が自らを正当化する(justifies itself)段階 ③今ここにある問題、目の前の現象に物語(narrative)が与えられる段階 ④見抜く(seeing through)ための道具として観念をもちいる段階」(ヒルマン 訳書, 1997, 272頁)にまとめている。これらの段階について、ヒルマンは「見抜く」ためにはどれも欠かせないことを強調している。
- 2) 分析心理学派の分析において用いられている技法。老松(2000)によると、この技法は「無意識から立ち現れてくるさまざまなイメージを相手に、自我が直接的な接触を持つとするとする」ものであり、具体的には、夢に出てきた重要な人物やふと意識に浮かび上がった人ないし物のイメージを相手に対話ややりとりを試み、それを全て記録するという方法である。
- 3) Jung, C.G. 1997. "SPRING TERM VI. 1 June 1932" in *Visions: notes of the seminar given in 1930-1934* by C.G.

Jung edited by Douglas, C. Princeton University Press, pp.705-723.

<引用・参考文献>

- 石川友香. 2000. 「重症心身障害児を育てる母親の視点の深化に関する臨床心理学的考察」 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文（未公刊）
- 石川友香. 2001 「障害児を育てる母親の視点の深化の過程に関する一考察 —重症心身障害児を育てる母親の事例と神話や伝承に見られる童児神のモチーフをもとに—」『大阪大学教育学年報 第六号』 289-299
- Hillman, J. 1975. *Re-Visioning Psychology*. Harper Perennial 入江良平訳 1997. 『魂の心理学』 青土社.
- Jung, C.G. 1951. *Aion-Untersuchungen zur Symbolgeschichte*, mit einem Beitrag von Dr. Phil. Marie-Louise von Franz. Psychologische Abhandlungen, Bd. VIII, Rascher Verlag. 野田 倬訳. 1997. 『アイオーン』 人文書院
- Jung, C.G. 1997. "WINTER TERM V. 17 February 1932" in *Visions: notes of the seminar given in 1930-1934 by C.G. Jung* edited by Douglas, C. Princeton University Press, pp.580-593.
- Jung, C.G. 1997. "SPRING TERM IV. 1 June 1932" in *Visions: notes of the seminar given in 1930-1934 by C.G. Jung* edited by Douglas, C. Princeton University Press, pp.705-723.
- Jung, C.G., Wilhelm, R. 1973. *Das Geheimnis der goldenen Blüte, ein chinesisches Lebensbuch*, Walter Verlag. 湯浅泰雄・定方昭夫訳. 1995. 『黄金の華の秘密』 人文書院
- 老松克博. 2000 『アクティヴ・イマジネーション』 誠信書房
- 湯浅泰雄. 1986 『ユングとキリスト教』 人文書院

A Study on the Process of the Deepening Viewpoint of the Mother Bringing Up A Handicapped Child (2)

ISHIKAWA Yuka

In my previous study, I defined a process of finding two opposing aspects in ourselves through our various personal experiences as “the process of a deepening viewpoint”. To show the process in concret terms, I interviewed 6 mothers each bringing up a seriously mentally and physically handicapped child.

In the present study, I especially focused on one mother's process. In the interview, this mother stated that there had been no major changes in her way of thinking following the various experiences she had with her handicapped child. So, it seems that in the process of ‘experiencing’ her viewpoint had not deepened. However, I considered that her viewpoint had indeed deepened. That is to say, I feel that through her various experiences she did take a deeper viewpoint by way of choosing to recognize one of the opposites. She deliberately opted for her original thought, which more or less includes its opposite.

According to C.G.Jung, the maturer person “has deliberate consciousness vision” and “accepts his own fate deliberately and consciously, accepts what he is”. I regarded the mother in question as having reached this stage, and I gave further consideration to her process.

As a result, I added such a stage to my original definition of the process. Accordingly, I redefined “the process of a deepening viewpoint” as a process of not only finding two opposing aspects in ourselves, but deliberately opting for the aspect that allows for acceptance of fate. In addition, based on the Jung's model of the development and differentiation of consciousness, I conceived this process to move in a circle.

